

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02899

研究課題名(和文) 元代江南における財務官僚群の動向と在地農商諸勢力の伸張に関する研究

研究課題名(英文) Research on the trends of the bureaucratic groups and the extension of local elite's power in the Jiangnan area during the Yuan period

研究代表者

矢澤 知行 (YAZAWA, Tomoyuki)

近畿大学・国際学部・教授

研究者番号：60304664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、元代中後期の江南地域における官僚群の動向を精査することにより、モンゴル政権による社会経済政策の変遷と地農商諸勢力の伸張についての具体像を解明することができた。とくに、平江城(現蘇州)において宗教文化施設の造営修築事業が当時活発化していたことを指摘するとともに、その背景に江南の文人官僚や富民の積極的な関与があったこと、また、平江を中心に活動した文人官僚鄭元祐と、当時の農商諸勢力の代表格ともいえる昆山の顧瑛の事績を分析することにより、彼らと元末浙西の張士誠政権との関係の一端などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, I reviewed the trends of the bureaucratic groups in the Jiangnan area during the mid to late Yuan period, and I elucidated the transition of socioeconomic policy by the Mongolian government and the extension of local elite's power. In particular, I pointed out the increasing tendency of construction/renovation of religious cultural facilities in the Pingjiang city (now Suzhou), and its background is that the active involvement of literary bureaucrats and wealthy people in Jiangnan. Then I analyzed the works of Pingjiang's scholar Zheng Yuanyou and Kunshan's wealthy class Gu Ying, and I elucidated their relationships with Zhang Shizheng government.

研究分野：元代史, モンゴル時代史

キーワード：元朝 江南デルタ地域 社会経済史

1. 研究開始当初の背景

(1) 元代の社会経済史研究は、先学諸氏によって戸口、税役、通貨、駅伝、商業、貿易など諸領域の成果が積み上げられてきた。しかし、宋代から元代を経て明清時代にいたる時代縦断的な把握が試みられるなかで、宋代と明清代に関わる研究が着実に進展してきたのに対し、モンゴル政権下=元代の社会経済史研究が遅れをとってきた感は否めず、モンゴル支配の下で中国の経済発展は阻害されたのか否か、といった問題についても明確な結論は出ていない。

(2) 本研究で研究の対象とする元代の富民・豪民、塩商ら在地農商諸勢力については、これまで官僚と豪民の関係や官僚統治機構など制度面の解明を試みた先行研究が見られるものの、在地農商諸勢力の伸張についての分析は十分に進められてこなかった。そこで、本研究は、元代中後期の江南地域に焦点を絞り、財務官僚群の動向を精査しながら、モンゴル政権による社会経済政策の変遷と豪民や塩商ら在地農商諸勢力の伸張という事実に着目して研究を開始した。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、元代の中後期の江南諸行省における財務官僚群の動向を分析するとともに、そのころ勢力を伸張させつつあった豪民や塩商といった農商諸勢力の具体像を明らかにすることにより、当時の社会経済の特質を明らかにすることを目的とした。

(2) また、在地の農商諸勢力、すなわち豪民や勢豪などと称される在地の有力者層や、塩商をはじめとする商人、海運に携わった海商や船戸などについても検討し、彼らの社会的性格や経済的基盤、モンゴル政権との関係などを解明することにより、従来の研究とは異なる視角から元代における社会経済史の展開を理解することをめざした。

(3) そして長期的な研究目標としては、モンゴル政権による江南経済的支配の特質、宋代や明清代との連続性あるいは質的相違などを明らかにすることを掲げて研究に臨んだ。

3. 研究の方法

(1) まず、元代の江南における社会経済政策史の展開過程を再検討するため、先行研究を

ふまえつつ論点を探ることから着手した。これと並行して、財務官僚群や農商諸勢力に関する主要な典籍資料だけでなく、地方志や文集、碑刻史料などに記されている断片的な記載も含め、国内外の多様な史資料の収集を行い、逐次その整理と解読を進めた。

(2) 具体的には、『元史』食貨志、『元典章』戸部、『永楽大典』所引の元代社会経済関連史料などに記載されている既知の実証的データを再点検する作業を行ったほか、江南における税、通貨、商業、貿易、塩政、漕運、水利など社会経済史の展開を整理して年表を作成するとともに、『大元一統志』等の地理書を活用し、当時の人口動態を考慮しながら、主要都市や官署、塩場、屯田の分布などを一覧できる歴史地図を作成した。また、文集・碑刻・地方志等の形で伝存する墓誌銘や頌徳碑、行状などの史料を渉猟するとともに、『元典章』の財政関連条項などの講読を進めた。

(3) そして、元代江南地域の財務官僚らについて、その出自や官歴などの様々な側面をリレーショナル・データベース(以下、「元人総合DB」)に入力し、彼ら相互の人間関係や官僚の群体としての動向、モンゴル政権中枢との関係などを分析した。

(4) 上述の史資料や「元人総合DB」を手がかりに、在地の農商諸勢力の実像やその急速な伸張の背景、彼らと財務官僚らとの関係などを具体的に明らかにするための作業を行った。

(5) 以上の研究内容を、元末の諸勢力に関する研究へと接続することを試みた。とりわけ平江(現蘇州)に拠った張士誠政権に関して、その成立の基盤に財務官僚群や農商諸勢力の一部が深く関与していたことの解明をめざした。

4. 研究成果

(1) 本研究では、元代中後期の江南地域における財務官僚群の動向を精査することにより、モンゴル政権による社会経済政策の変遷をめぐる状況や、豪民や塩商ら在地農商諸勢力の伸張についての具体像を解明することができた。

(2) まず、モンゴル元朝治下の江南地域社会について、先行研究を網羅的に検討しながら、社会経済史上の諸論点を整理して提示し

た(「モンゴル元朝治下の江南地域社会をめぐる諸論点 -元代中後期の社会経済史を中心として-)。具体的には、モンゴル元朝の治下にあった江南地域社会について、モンゴル元朝の「統制/放任」姿勢、江南地域社会の「従属/自立」態度という二対のベクトルを念頭に置き、両者の間に働く力学を解明することの必要性を説いた。そして、今後の研究上の諸論点として、江南在地の官僚・胥吏たちや農商諸勢力の動向を把握すること、江南地域の多様性に注意を払いつつ、いくつかの地域クラスターを想定して分析すること、時代の変遷にともなってモンゴル元朝による江南支配のあり方が変質した可能性などを指摘することができた。

(3) つづいて、平江・嘉興・松江の人口増加を手がかりにして元代江南デルタにおける空間単位の変化とその意義を考察した(「元代江南デルタにおける空間単位の変化と産業動態 ~平江・嘉興・松江の人口増加を起点として~」, 「元代平江城の空間構造とその変化」, 「元代江南デルタにおける空間単位の変化」)。これは、上述の地域クラスターを想定した歴史地理学的分析作業ともいえるものであり、平江城における官署の位置や農商諸勢力の拠点とその立地条件、都市の内部構造や社会構造といった歴史地理学的考察を行うことにより、都市内部における財務官僚や農商諸勢力の位置づけを把握することに主眼を置くものであった。

(4) とくにここで指摘した点は、元代中後期における長江デルタ地域の人口移動の傾向について、平江路内部に格差を生みつつ崑山から太倉へと展開したこと、嘉興路から松江府が独立し、さらに上海県へと展開したことの二点である。そして、その人口移動は水運網の変化やその背景として考えられる産業動態と密接に関わり合う水平的展開の様相を呈していたことを明らかにした。具体的には、元代長江デルタ地域における諸産業の多くは、絹織物業をはじめとして南宋以来のものを継承発展させたものであったが、新たな動向として、松江などにおける綿作の普及、塩場の整備、呉淞江から黄浦江への重心移動などが生じてきた。そこには、海運というマクロな社会経済的活動に伴う外的な要因や、長江デルタ地域内部の人間の多様な社会経済的活動の進展、さらにはそれらと自然環境

との間の影響関係など、様々な力が複雑に絡み合っていたことなどを解明した。

(5) そのうえで、江南デルタにおいてとりわけ顕著な人口の増加を示した平江城(現蘇州)に着目し、空間構造や都市機能の特質を探ったうえで、そこで行われた造営修築事業およびその社会経済的背景について考察を行った。そこから明らかになった点として、まず、元代の平江城における各城門と外界との接続や官府の配置が実際の・現実的な布置であったこと、その特徴から導き出せる通り平江城が外界に開かれた空間構造を持っていたことが挙げられる。次に、元代のとりわけ中後期に造営修築事業が盛んに行われ、書院の創設など宗教文化に関する施設がその多くを占めており、平江城が、当時自立性を強めつつあった江南の文人士大夫層にとっての中核都市であったことを指摘した。また、これらの造営修築事業に関与した官僚や富民などの人物群の詳細についても明らかにし、事業自体は基本的には官僚主導で行われていたものの、平江城の富民たちの経済的協力を背景としていた点についても言及した。そして、平江城における造営修築事業の活発化は、江南在地の富民たちの経済力と存在感が強まってきたことや、文宗トクテムル期の頃からの江南の富民たちへの統制が弛緩したことと密接に関連するのではないかと考察した。一般に元代の中後期は、中央における政局の混乱もあって、低迷した時代と捉えられがちである。だが、長江デルタ地域の平江城にあっては、南宋時代以来の繁栄を継承しつつ、諸産業の発展を背景に富民たちが社会経済力を蓄えていた時代といえるものであり、元末明初の混乱期をはさむものの、明清時代における社会経済文化の充実の萌芽は、元代中後期の平江城においてたしかに兆していたと論じた。

(6) 最後に、財務官僚群の動向と農商諸勢力の具体像の解明を進めるとともに、それまでの研究成果を元末の諸勢力に関する知見と接続させることをめざす発展的な研究を行った。元代中後期の浙西地方には、さまざまな立場の文人士大夫がいたが、このうち平江を中心に活動した文人官僚鄭元祐と、当時の農商諸勢力の代表格ともいえる崑山の顧瑛を取り上げ、彼らをとりまく人間関係や、当時の社会経済状況に対する彼らの関心の

所在，元朝や張士誠政権と彼らの関係などを明らかにすることができた。

(7)しかし、次の諸点について課題が残された。まず、元代江南デルタにおける空間単位の変化とその意義に関していえば、黄浦江への重心の移動と松江・上海の勃興の因果関係について、地誌資料なども参照してさらに精査する必要がある。また、綿花の生産から織布・染色にいたる一連の工程について、“農村-市鎮-都市”の分業が元代においてどれほど進んでいたのかという点や、綿製品の流通に関わる牙行などの実態についても検討する必要がある。さらに、平江城内外や松江など市鎮の富民・豪民による“商業的物流”の実相分析についても、明清代の史料から元代に遡及しながら考察する余地が残されている。

(8)もう一点、モンゴル元朝による江南支配のあり方が、時代の変遷にともなって変質していった可能性についても、今後の課題として提示しておきたい。筆者は旧稿において、淮浙地域における塩政の展開過程を検討し、そこに二つの緩やかな画期、すなわち、1290～1300年代「中書省派による塩政の主導権把握および榷塩法への移行」、1330～40年代「在地豪民・塩商の勢力伸長を背景とする通商法への回帰」が見られるという仮説を示した。このうち、は、モンゴル元朝による江南への統制が強まり、支配体制が確立した時期であり、一方、は、江南在地の農商諸勢力が伸張し、江南地域の自立性が相対的に強まった時期と考えられる。しかし、至元末・大徳から天暦年間にかけての商税額の急激な減少をどのように理解するかなど、現段階では論証の不十分な点が多く残されている。

(9)その他、元代中後期の政治動向、とりわけ江南支配政策の変遷との影響関係や、張士誠政権期の平江についての再検討、明清代との接続をめぐる問題などとあわせ、今後の課題としておきたい。

(10)これらの研究を着実に進めていくことによって、元代江南の社会経済の具体的実相や、モンゴル元朝と江南地域社会との間に働いていた力学、モンゴル政権による江南経済支配の特質などを解明することや、将来的には、宋代・明清代との連続性あるいは質的相違についての解明につながっていくものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

矢澤知行，鄭元祐と元代中後期の平江，*Journal of International Studies*，査読無，2，2017，pp.55-68

矢澤知行，元代平江城における空間構造の変化とその背景，*Journal of International Studies*，査読無，1，2016，pp.129-142

矢澤知行，元代長江デルタ地域における水利網の変化とその背景，*中国水利史研究*，査読無，44，2016，pp.21-36

矢澤知行，元代江南デルタにおける空間単位の変化，*資料学の方法を探る*，査読無，15，2016，pp.63-69

矢澤知行，モンゴル元朝治下の江南地域社会をめぐる諸論点 -元代中後期の社会経済史を中心として-，*愛媛大学教育学部紀要*，査読無，62，2015，pp.245-253

[学会発表](計2件)

矢澤知行，元代平江城の空間構造とその変化，*愛媛大学資料学研究会*(愛媛大学，愛媛県松山市)，2016年2月

矢澤知行，元代江南デルタにおける空間単位の変化と産業動態 -平江・嘉興・松江の人口増加を起点として-，*中国水利史研究会*(兵庫教育大学ハーバーランドキャンパス，兵庫県神戸市)，2015年11月

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

矢澤 知行 (YAZAWA, Tomoyuki)
近畿大学・国際学部・教授
研究者番号：60304664

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし